

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2022年 11月のおわりごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！ 晩秋のころ、木々の葉が紅葉していくにつれ、町の色が優しくなるように感じるのは、私だけでしょうか。幼稚園のケヤキやイチョウ、サクラ、カエデ、カキの葉もそれぞれのペースで紅葉中です。冬の足跡が聞こえてきそうですが、気持ちの良い秋の日が1日でも多いといいなと思います。

「ぐりとぐら」の絵を描かれた山脇百合子さんが、今年9月29日に亡くなりました。とても残念です。長年、こどもたちにすてきな絵を描き続けてくださいました。感謝の気持ちを込めて、今回、「大人のみなさんに」で山脇さんの絵本を2冊紹介いたしました。

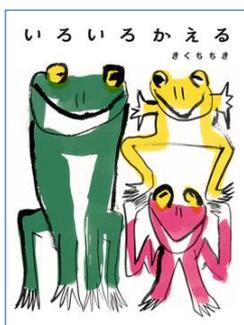
では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

須藤麻江 近藤千春（本の部屋担当）

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

- ① たんぽぽ組・年少組のみなさんに②年中・年長組のみなさんに③大人のみなさんに
- ・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刻される可能性もあります。
 - ・紹介した絵本は重版未定も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。

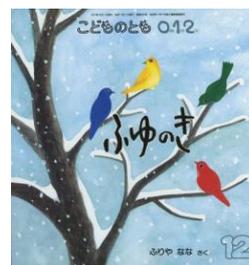
① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



「いろいろかえる」



「くんちゃんのだいいょこう」

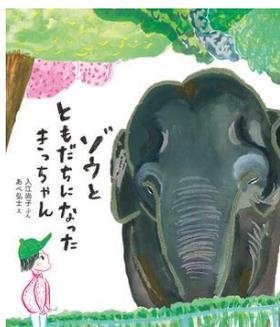


「ふゆのき」



「タンタンのずぼん」

① 年中組・年長組のみなさんに。



「ゾウとともだちになったきっちゃん」



「おそうじロボットのキュキュ」

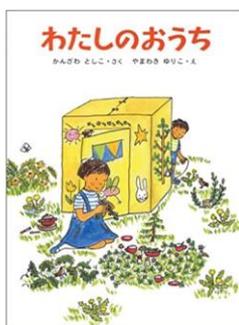


「もっとおおきなたいほうを」

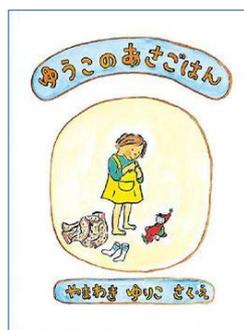


「わらしべちょうじゃ」

② 大人の方々に。



「わたしのうち」

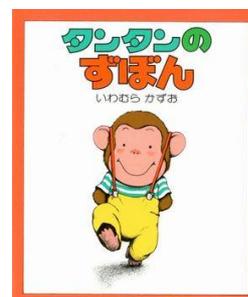
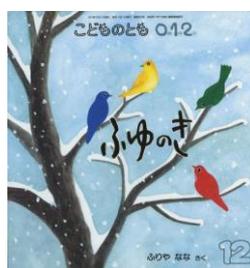
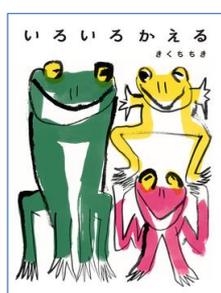


「ゆうこのあさごはん」



「まどのそとのそのまたむこう」

① たんぽぽ組・年少組の方々に。



● 『いろいろかえる』 きくちちき 作（偕成社）1540円/2021年
 「あさですよ」で始まって、まず、緑色のカエルが草むらで虫を捕まえてごきげん。はねるのが好きな黄色いカエルがやってきて、はねてはねて、踊るのが好きなピンクのカエルがやってきて、踊って、踊って……。オレンジ色、青色のカエルもやってきて、楽しく過ごしていると、お迎えに来たのは、父さんがえると母さんがえる。おしまい、「おやすみなさい。かえるたち」。園で遊ぶ子どもたちの姿が、かわいいカラフルなかえるたちに重なります。絵も生き生きして気持ちがいいです。（須藤）

● 『くんちゃんのだいいょこう』
 ドロシー・マリノ 作 石井桃子 訳（岩波書店）1100円/1986年
 (もうお気づきだと思いますが・笑)わたしがこよなく愛する「こぐまのくんちゃんシリーズ」の中の1冊です。幼い子どもの家庭での暮らしとその日常が、ごく自然なあたたかみをもって描かれているのはもちろん、読後には何とも言えない幸福感に満たされるのが大きな理由のひとつです。さて、今回のくんちゃんは、冬越しをする渡り鳥に憧れてその後を追い、自分も一緒に南へ旅立とうとします。ところが、お母さんにさよならのキスを忘れ、双眼鏡を忘れ、釣り竿を忘れ、水筒を忘れたことを思い出すたびに丘を降り舞い戻って……。あ、ちなみに、心配するお母さんに対するお父さんのひと言は「やらせてみなさい(優しいまなざし)」…ああ、何度読んでも“惚れてまうやろ〜”となるわたしです。（近藤）

● 『ふゆのき』

ふりや なな 作(福音館書店)429 円/2011 年※重版未定

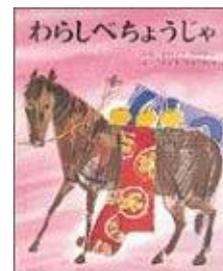
雪のつもった1本の木に、赤・青・黄・緑それぞれの色も鮮やかな鳥が飛んできます。1羽ずつ飛んできて、1羽ずつ赤い実をついばんで、そして1羽ずつ飛び去っていく。それだけの絵本。けれど不思議なくらい心がしんと鎮まります。どうぞ穏やかな心持ちの時に(ここ大事ね!)、ページめくりもゆっくりと、贅沢気分でどうぞ。シンプルな構図は逆に想像を呼び起こしてくれるので、動かない絵を心の中で動かし、まるでその場にいるような錯覚さえ感じたりして。子どもは子どもの視点で、大人は大人の感性で味わうことのできる、上質な絵本だと思います。(近藤)

● 『タンタンのずぼん』

いわむらかずお 作(偕成社)707 円/1976 年/

おさるのタンタンお気に入りのズボン、おばあさんが作ってくれたもの。でもそのズボンは大きくなってからはけるようにと「だぶだぶ」で、「ずぼんつりはのびすぎる」のです。でも、タンタンってほんとにすてき。だって、「いろんなことができるんだ」と、楽しい遊びに昇華させちゃうのですから。ぶらんこ・ヨーヨー・でんしゃにタクシー。ぱちんこで飛んでジェット機にも!ラストページのタンタンの後ろ姿なんてもうたまりません♪同シリーズの『タンタンのぼうし』『タンタンのはんかち』もおすすめですよ。(近藤)

② 年中・年長組のみなさんに。



● 『ゾウとともだちになったきっちゃん』

入江尚子 文 あべ弘土 絵 (福音館書店) 1430 円/2020 年

作者の入江さんは動物行動学者でゾウの研究者です。低周波音を観測できる機械を使って、ゾウの秘密のおしゃべりを研究したこともあるそうです。そうしたら! 青草を黙って食べているゾウたちが、ぺちゃくちゃおしゃべりをしていたそうです。面白いですね。このお話は、きっちゃんという女の子が動物園のゾウと心をかよわせ、ゾウの声を感ずるようになるまでが丁寧に描かれています。動物園にはきっちゃんのようなお客さんと仲良くなるゾウもいるそうです。わたしも今度、動物園に行ったら、ゾウの名前を呼んでみようかな。(須藤)

● 『おそうじロボットのキュキュ』

こもりまこと作 (偕成社) 1540円/2021年

舞台は都会のはずれの、ロボットばかりが暮らす町。ここには、みんながジュースやオイルを飲んで元気をつける、キングドリンク・ショップがあります。ショップは古いけど働き者のロボットのおかげでいつもきれいです。そのロボットの名前は、動くたびにキュキュと音がするので、キュキュ。ところが、ある日、キュキュはとうとう壊れてしまいます。代わりにきたロボットはちゃんと仕事をしないのでショップはみるみる汚くなっていきました。さあ、キュキュは帰ってくるのでしょうか。「バルンくん」「ダットさん」など車の絵本が多い、こもりまことさんの作品です。(須藤)

● 『もっとおおきなたいほうを』

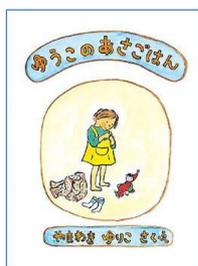
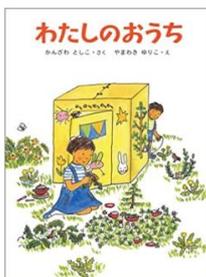
二見正直 作(福音館書店)990円/2003年

あるところに王様がいました。王様は先祖代々より伝わる「たいほう」を打ちたくてたまりません。ある日、領土内の川で魚を獲るキツネが現れました。「たいほうでおっぱらってやる」王様は大砲をドカン。念願かなうも、なんとキツネはさらに大きな大砲を持ってきて王様を脅します。それならとさらに大きな大砲を作って脅し返す王様。キツネもさらに…。笑っちゃうくらいこっけいな脅し合いの結末やいかに?!…大丈夫。最後まで楽しいです。相手が化けの天才キツネでよかったかも。人間の心理や戦争の本質を、ここまで寓話的におもしろがらせるなんて。作者さんの力量に、ただただ感服します。(近藤)

● 『わらしべちょうじゃ』

さいごうたけひこ 文 さとう ちゅうりょう 絵(ポプラ社)1100円/1967年
秋は新米の季節。うれしいですね。こまばっこ(特に年長さん)にとって、稲穂は身近なものでますます素敵。さて、この昔ばなしは「わらしべ」から始まります。ひどく貧しいひとりの男が、かんのん様のお告げでつかんだわらしべ1本。このわらしべが、困った状況の人との出会いと交換をくりかえすうちに次々と他の〈モノ〉に代わり、やがて男は幸せをつかむというサクセスストーリー。いやはや人生の話として奥深いのなんの。よく練られた再話を一段と引き立てる絵はドーンとダイナミック、かつ、あたたかくて柔らかい。存分に味わってくださいね。(近藤)

③ 大人のみなさんに。



●『わたしのおうち』

かんざわとしこ 作 やまわきゆりこ 絵 (あかね書房) 1430 円/1982 年
わたしは、だんボールで「わたしのおうち」を作ります。弟がいたずら書きをするので、外へ運んで作ることにしました。わたしは、訪ねてくる誰かさんのことを想像しながら遊びます。やまわきさんの絵が、かんざわさんのお話を楽しく、感じよく膨らませていきます。やまわきさんの描く子どもや動物たち、植物、鳥や虫・・・全てが温かい。私は一度ご自宅でお茶をご馳走になりながら、おしゃべりしたことがあります。その昼下がりのひと時を記憶のポケットに大切にしまっておきたいと思います。(須藤)

●『ゆうこのあさごはん』

やまわき ゆりこ 作(福音館書店) 990 円/1971 年
ゆうこは、ママが洗濯物を干しているあいだ、ひとりで朝ごはんを食べることになりました。顔のあるゆでたまご(←たぶんママが描いてくれた)の殻をむこうとすると、そのゆでたまごがしゃべりだして…!? ゆでたまごと小さくなったゆうこの、つかの間の冒険を描きます。「びゆことおし」「びゆやおとおし」は、ゆでたまごがゆうこにかける魔法のおまじない。ぜひ一緒に読み合いながら、楽しい謎解きもしてみてくださいね。実姉の中川李枝子さんをはじめ、たくさんの作家とコンビを組んで素敵絵を描いてこられた山脇百合子さん。この絵本は文章もご自身で手がけられた貴重な作品です。今まで、ほんとうにありがとうございました。合掌。(近藤)

●『まどのそとのそのまたむこう』

モーリス・センダック作 脇 明子 訳(福音館書店)2200 円/1983 年

※重版未定

芸術的で思索的。震えあがるほど美しく深い作品世界。…と、まずは書き出してみたのですが、さて、この絵本の魅力をどう伝えればいいのか、実は悩みました。ヤボとはわかりつつ、あらすじだけをひと言でいうなら〈女の子アイダが、ゴブリンたちにさらわれた妹赤ちゃんを助けて戻ってくる話〉。とにかく、アイダくらいの年のお子さんと一緒に読まれてみてはいかがでしょう。グイグイと引き込まれていく真剣な子どもの姿に驚かれるかもしれません。あのセンダック(『かいじゅうたちのいるところ』はあまりに有名)が、完成までに1年半を費やしたという渾身の作。曰く、「三層でこだまする作品になった」と。はあ…。読み返すたびに、ここではない場所に連れていかれます。怖いだけでなく、目が離せなくなるというのか。そして、大人としてはいろいろなことを感じ・考えさせられて、しばしボーッとしてしまうのです。よかったら感想おしえてくださいね。ドキドキ。(近藤)